

比庵佳境の会

富士の山みゆるところにをる人は
あした夕べにたのしかるべし

比庵九十三

富士山
昭和50年



清水比庵周辺の人々と 自用印と(三)

相模女子大学名誉教授

柿木原 ぐみ

一 桑田笹舟と青山杉雨と

清水比庵周辺の人々として、保田與重郎と大本琢壽について述べた。比庵の書についていわゆる書壇に属する書家として発信したのは、桑田笹舟(一九〇〇—八九・広島県出身)と青山杉雨(一九一—一九三・愛知県出身)の二人である。

笹舟は比庵の書に出合い、すばやく行動している。昭和三年自身が主宰する『書藝公論』九月号を、「清水比庵特集」とした。また、同誌の三五年三月号で再び「清水比庵特集」を行った。そして、三十七年一月、一楽書藝院より、書画集『比庵』を刊行した。原色図版一、コロタイプ図版五一で、当時の最高水準の印刷技術による。限定四〇〇部が足りず、二〇〇部を追加したという。比庵は、笹舟が自分の仕事として後世に残すものと、非常に念を入れて編集して下さったと、記している。

比庵の随筆集『紅をもて』に「桑田笹舟展のことなど」(昭四二年三月)とする一文がある。比庵はパーティーでの挨拶で、桑田先生はよく自分の作品についてつぶやかれる、それは上手すぎるというつぶやきだが、玉堂先生も描きすぎる、とつぶやいた。二人のつぶやきは贅沢で第一級のつぶやきであり、故に二人の芸術は同格である、と結んだという。そして桑田先生ほど自分の書風を門下に押付けない書家はない、見識のある大家としての態度であると書いている。

青山杉雨は、三四年九月「近代書道グラフ」

(近代書道研究所・青山杉雨主宰)で、「八一」と比庵の作品」を特集した。比庵は『紅をもて』の文中「帰庵和尚」の項で、近年小生と会津翁とがよく対照されて話題になったとき、両方の作品を見比べてほ、笑んでをられたのは帰庵和尚であった、と記す。ところで今回は実を結ぶことになった、東京の「近代書道グラフ」で鑑賞的の雑誌、四方の書家の近作を紹介している」と記している。また、四三年「比庵 歌書画」の刊行にあたり、掲載の画については小林和作、書は青山杉雨に見て貰ったのでよいものになる、うれしく思うと書いている。

「近代書道グラフ」掲載については、「窓日」主宰の江連白潮が、清水比庵の横顔、と題して、八一と比庵を並列するということはよほど達観の士でなければなし得ない、と記している。杉雨は、この二人の作家は相互に何の関係もないのだが、書壇に因縁がないという点だけが共通である、と書いている。そして、今日「近代詩文」の運動はかなり盛んになりつつあるが、この二家は特別その様なものを意識もせず、この問題への解決を暗示して居る点には特に注目すべきではないかと思う、と続け書壇に警鐘を打ち鳴らしているが、令和になつてなお、変わらない現状である。

比庵は『野水帖 比庵歌・書・画』の序文(昭和四五年元旦)に、次のように記している。

小生は自然に歌と画と書とを習得して、そのまま之が一体となつて作品に現はて、之が小生の作品の特徴となつてをる。尚一歩進んで之を云つておくなら、小生の歌、画、書は日本の国民性の上に立つて、国民にわかり、国民に楽しめるやうな歌であり、画であり、書である。国民にわかるやうな芸術、之が至上の芸術の建前であると云わないけど、之は所謂芸術家と自称してゐる人たちの唱へる理窟入りの芸術に比べれば、その純度に於いて比較にならぬも

のと思つてゐる。

前後するが昭和三三年一月号の「近代書道グラフ」は、新春慶祝詞文集の特集で、七十余点の作品が掲載されているが、桑田笹舟は比庵の「朝日いま上らむとしてくれなゐに東なかばを染めばかしたり」の歌を書いている。

比庵の逝去は昭和五〇年一〇月三〇日であるが、この年春開催された笹舟の個展が最後の外出となったという。比庵絶筆は「大いなる文字書きてをる夢ばかり病臥五十日いまだ書き足らず 仰臥書之 比庵」で、六月末から七月初めに書かれた作品である。

二 比庵自用印について

比庵の自用印について、まずその数について述べよう。清水家に保管されている印は七十二顆である。平成二七年八月、の日付で、印影、印の写真、印文、印の種類(雅号印・姓名印・成語印)、印の寸法、材質、刻者、製作年、側款、鈕など詳細に記録された印譜「清水比庵自用印」(清水家保管)が作成され、六〇顆が収録されている。その後、新たに比庵が別な小箱に入れていた一二顆が発見され、令孫清水固氏より連絡いただいた。したがって、現在七十二顆が清水家に保管されていることになる。比庵印譜としては、左記の書籍に収録されている。

一、『清水比庵作品集』三五顆

二、『比庵百華』七二顆

三、『清水比庵―毎日佳境―』七三顆

以上の三点に収録されている印影を見ていくと、『清水比庵作品集』に収録の三五顆はすべて『比庵百華』収録七十二顆に含まれている。『清水比庵―毎日佳境―』は収録数が『比庵百華』より一顆多いが、この一顆は朱文「清水秀」印である。同印は筆者の調査では八点の作品に押捺されているので、印譜に採られたと考える。

『比庵百華』と清水家保管印は七十二顆で同数であるが、内容は一致してはいない。清水家保管の印の中には、比庵の書をそのまま刻したと思われる印三顆、比庵八十八のように年齢を加えた印四顆の計七顆を含む。雅号印で石印と木印の二顆を同一と考えるべきを四顆と数えていたり、印材の寸法が同一で共に側款に啄人とあり印影も同一と見紛う白文印は、先の三印譜ではいずれか一方を掲載している。そのことを至極妥当と判断し、これら六顆を実質三顆とみなし、書をそのまま刻した印と年齢印の七顆を減じると、清水家保管は六二顆となる。

六二顆の内容をさらに検討していくと、「文墨友(文学・芸術に親しむこと)は『比庵百華』以外では採録されていないが、同印は清水家保管にはなく、それ以外の成語印が六顆確認できる。そして、雅号印「比庵」朱文印二七顆・白文印二〇顆、「比舟」朱文印二・姓名印(秀字の入っている)朱文印六顆・白文印一顆で合計六二顆となる。

したがって、『比庵百華』掲載の印譜七十二顆は、最も充実した印譜であるといえる。比庵自用印の製作年や刻者については、側款がない印が多く十分調査ができなかったが、既刊の作品集の掲載作品への使用印について、分類を試みた。作品集名を次に示しておく。

1、『比庵』(昭三七) 一楽書芸院(桑田 笹舟主宰)

2、『八十五比庵』(昭四二) 書道研精会

※書道研精会は『九十二比庵』(昭四九)まで毎年刊行

3、『比庵 歌・書・画』(昭四三) 求龍堂

4、『野水帖 比庵歌・書・画』(昭四五) 清水三溪

5、『清水比庵作品集』(昭五三) 朝日新聞社

6、『比庵百華』(昭六三)「比庵百華」刊行委員会

7、『高梁市名誉市民 清水比庵作品集』(平九) 高梁市教育委員会

8、『清水比庵―毎日佳境―』(平一三) 笠岡市立竹喬美術館

9、『まどかなる清水比庵 歌と書画の世界』(平二一) 上置四郎著 二玄社

10、『清水比庵 温かき歌人のまなざし』(平二七) 遠山記念館

11、『清水比庵 収蔵品図録』(平二九) ヴォーミュニアム

以上の書籍の作品図版から印影を分類したが、判読不可能な作品 押捺のない作品等もあり全作品数を集計してはいない。コピーをとり同一作品の複数掲載については配慮しながら、印影毎集計紙に記入する手作業で、七〇顆について調査した。ここでは、比庵の使用の多い印、刻者の特定できる印等三二顆を取り上げることとする。



①比庵作品の中で最も多くの作品一〇八点に押捺されている雅号印である。八〇余点が漢字一〜五字の作品で、五言や七言絶句は一〇点ほどである。残りの

一五点が短歌を書いた作品である。印の使用の最初は「八十比庵」で七作品に押捺され、「比庵八十一」から「比庵八十四」までは一〇点前後、「比庵八十五」で三三点、「比庵八十六」は二二点、「比庵八十七」は八点、「比庵八十八」から「比庵九十一」までは一〜四点と減じるが、「比庵九十二」は二二点、「比庵九十三」では八点と盛り返している。ともあれ、最も愛用された印である。

②五二作品に押捺されている。「正月雀」と呼ばれている比庵の愛蔵品の浩堂写の竹群と



雀の二曲屏風に、「七十なる歳の正月雀ひとつわが画き添へぬ 一歳を加ふることにひとつづつ、雀を添へむ」と書き入れ「昭和二十七年正月 比庵誌印」としてこの白文印を使っている。その後の使用は、八十比庵以降で九十三まで、比較的小品に使用している。ユーモラスな表情の白文で、比庵作品によくなじむ印といえよう。



③石井雙石刻である。石井雙石(一八七三—一九七二)は比庵より一〇歳年長千葉の人。篆刻研究誌「雕蟲」(通算三四一号)発行。

古銅印の時代考証の一方趙之謙を学び、七十年代以降は飄逸な印風で、九十を超えてなお刀を執り「篆仙」と称された。雙石といえは「一笑百印」を思い出すが、戦後の印材の乏しい時期竹根や南瓜のへたに刻された百顆印は、人としての雙石の生き方を学ぶ作といえる。比庵自用印中雙石刻は一顆のみである。側款に記年はないが、八〇歳を過ぎての作と思われる。端正で文人的な風格がある。雙石の石印と別に模刻をした木印があり、旅行用に町の印刷屋で制作したと推察する。

作品への押捺は七〇点で、画のない書作品への使用が圧倒的で、比庵自身も著名な篆刻家雙石刻であることを意識しているようである。最初の使用は落款に「七十六比庵」と入れた作で四点点あり、「七十六比庵」が一点ある。

「七十七比庵」から「比庵七十七」と移行、その後は、比庵に続けて年齢を書く落款のスタイルとなる。また、この印は昭和四三年九月求龍堂より刊

行された初めての作品集『比庵 歌・書・画』の外箱に、およそ一七センチ四方に拡大され、型押しされている。外箱もクロス張りであり、影はそのクロスをえぐって白文印のようである。



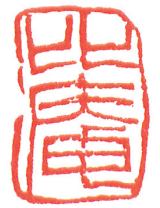
④比庵の白文印の中で最も大きい。刻者は不明。押捺作品は四八点。最初の使用作品は、比

庵八十七。四八点中三七点の作品は、比庵八十五歳より毎年一冊ずつ刊行された書画集『八十五比庵』に始まる書道研精会（編集吉田昭竜）の作品集に収録されている。書道研精会によるこの作品図録は「九十二比庵」まで毎年十二月に八冊刊行され、四〇点ほどの作品が掲載された。この印は最晩年のもので、大作の書作品に使用されている。



⑤変形朱文の木印で側款は琢洞。四七作品に押捺されている。大きな特徴としては、合作に多く使われていることである。川合玉堂六、奥村土牛・小倉遊亀が各一、妹章子が二

の計一〇点を数える。玉堂との交友は昭和一七年の第一回野水展から比庵六〇歳であった。玉堂は三二年、比庵七四歳の時没しているから、この印は昭和二〇年頃から使われたと推察する。最晩年の作・竹林にも押捺され比庵のお気に入り印で、四七作品のうち扇面の一点以外は、すべて歌書画作品である。



⑥変形朱文の木印で側款は琢。琢洞の琢かとも考えるが、未詳。四五作品に押捺されている。うち富士山の画は一〇点を数える。この印が最初に押捺されたのは比庵七五歳の「悼玉堂先生」で「昭和三十三年六月三十日清水比庵印」との落款がある。玉堂は昭和三十三年六月三〇日に逝去しているので、哀悼の長歌は「一年は早くも過ぎぬ……」と詠まれている。その後は八五歳以降九三歳まで愛用している。



⑦刻者は梅舒適（二九一六一二〇〇八）本名は稲田文一。書・画・篆刻を三位一体として追究し、清朝の印人の志向を日本の印人として実践した。梅舒適の刻風は比庵の作品によく似合う。側款は丁齋。最初の使用は「八十一比庵」七点である。「比庵九十二」の落款まで三八点の作品に押捺されている。ほぼ歌書画の小品に使っている。

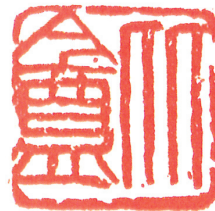


⑧この朱文四分印の刻者も梅舒適である。側款に、丁齋刻とある。この印の使用されている作品の最初は「八十比庵」とある。品の最初は「八十比庵」とある。

その他は「比庵九十一・九十二・九十三」とする作品と、「比庵」とのみ記されている五作品での押捺が確認できる。作品の題に雨の宿、松林、梅林、ふるさと、雀、桃咲、春とあるが、この小印が画面を引きしめて清々しい。印の大切さを痛感する。中で雨の宿と題する作は蛙の眼の表情が生き生きとしてよい。

梅舒適は筆者の高校の先輩・奥谷九林（二九四九—一九九八）の師であったので、親しみをおぼえる篆刻家である。比庵との交

流など調べたいと思うが、今のところ手がかりがない。手元に、舒適の平成七年日展出品作「人生如夢」の印影（印刷）がある。言葉の持つ意味を朱白の線で表現した印影には、魅せられます。書・画・篆刻の三位一体をめざした舒適は粋な文人でした。



⑨石印。刻者不詳。三七点に押捺されている。作品の八点到「喜寿比庵」と入れている。また六点は歌書画で、八点が歌書、一二点は書作品である。「比

庵九十三」とする作品も三点含まれている。



⑩側款に「昭和丙子初春 琢洞刀」とある。昭和丙子は二年（一九三六）。琢洞、という印人の詳細未確認。比庵の自用印の刻者として、二顆を数える。比庵は昭和一〇年頃、筆名を比舟から比庵へ改めた、とされる。この白文印は二一年刻であるから、改名を裏付けるものである。この印の最初の使用例は「金太郎 為固坊」で昭和七年、次が「立雛 為好子」で昭和十年と推定されている。しかし、比庵の改名と側款の款記とを考えると、この二作品は二人の誕生の年ではなく、七五三などの折に書かれたものであろうと推察するの

が、至当である。この印の押捺は三〇点。年令の入っていない作品も一〇点あるが、「比庵八十二」から「比庵九十三」まで確認できる。



⑪朱文印、側款もなく刻者不明。押捺作品は三〇点で、ほ

とんどが、歌・書・画の小品である。最初の押捺は「比庵七十八」で「比庵九十三」まで使用。八十一と、八十四から九十一までの使用例は未確認。



⑫比庵白文印。側款なし。比の字が鶴の並び立つような相を見せる。二八点の作品に押捺されている。落款に年令の入っていない作品が一点あるが、「比庵九十一」（書道研精会）所収なので九十一歳の作と確定できる。最初の作品は比庵八十四で、九十九・九十二・九十三の押捺作品がないものの、最晩年に愛用された印である。



⑬琢洞刻の白文印である。石印と木印の二顆あるが、石井雙石刻の朱文印同様、旅行用に町の印刷屋で調達した木印であろうと推察する。作品への押捺は二七点。最初は「七十五叟比庵」で「比庵九十三」まで使用されているが、七十七・七十九・八十一・八十三・八十四・八十六・八十七・八十九は一点もない。書作品への押捺を中心とし、画は三分の一位にとどまる。



⑭側款なく刻者不明。二七作品への押捺がある。川合玉堂との合作である「先生と私」、弟三溪との合作である「枯芒」に使用している。比庵の落款による最初の作は「比庵八十五」で「比庵九十三」まで使われているが、玉堂は比庵が七四歳の時に没しているから、玉堂没後の十年余使用されていなかったようである。また二七点中、二五点は歌書画の小品である。次号へ続く

歌書画の小品である。次号へ続く

比庵作品展をめぐる

岡山駆けある記

二〇二一年四月三日～五日

比庵佳境の会

村本 慎一

新型コロナ禍の中ではありましたが、この春比庵の故郷岡山はちよつとした比庵ブームでした。『比庵佳境の会会報』以下『会報』15号で紹介されていたように、まず浅口市金光図書館で四月三日から一年間にわたる比庵展の開催、笠岡グランドホテル内のワコーミュージアムが四月十日にリニューアルされ、その一室が比庵作品と、笠岡の僧で南画家の津田白印の作品に当てられること、また比庵のご母堂と鶴代夫人の実家笹田家のあった有漢の芳烈酒造での四月六日から一カ月間の比庵展と、それに因んだ純米吟醸酒「水清き」の発売です。

これらのイベントに出掛けられる予定であった比庵ご令孫で「比庵佳境の会」会長清水 固様がご都合で急遽岡山行きを取り止められ、代わりに同会幹事比留間哲生様、会計窪田信行様が出かけられるというので、お伴をさせていただきます。実は私にはひそかな望みがありました。それは平成二五年の秋、高梁市文化交流館で開催された比庵展に清水固様のお伴で訪れながら、天空の城として有名な備中松山城に時間的制約から登れず、今回の岡山行きを機会に、是非実現したいと思つたわけです。

四月三日（土）金光 笠岡

早朝、新幹線で新横浜を発ち午後二時過ぎ金光着、すぐに金光図書館へ。この比庵展

で目を惹いたのは何ととっても金光教四代目教主金光碧水氏と比庵との深い心の交流を示す書画と、おびただしい数の絵手紙でした。

あふごとに親しきかもよ語る、こと
楽しきかもよ永くあれ今日は

と比庵が詠めば、「比庵先生にお会いすれば、いつでもどこでも心安らぎ、清められ楽しい事でした」と、碧水教主は喜びの思いを述べておられます。碧水教主は比庵について一六一首の歌を詠まれたそうですが、うち



金光図書館比庵展「あふごとに」

九二首は比庵没後のものであり、その中に

比庵翁のいのちとどめし作品に
今日のが目が来て逢ひまつる

という言葉が浮かびました。

は

さざなみもあはく消えなむ海ひろく
朝日に染めてなぎわたるなり
といった格調高い歌や

鐵齋も至り得ざりきすこやかに
九十の歳の朱のあけぼの



金光図書館比庵展入口

という尊敬した富岡鐵齋の享年を超えた心境歌に交じり

涼しくといふよりは今日は寒くあり
ネルを着て焼薯をたべてをる

という八十四歳（数え齢）のときの歌を見つけると、思わず頬が緩みました。この銜いのなき、あるがままを心の赴くままに詠うところに、今もなお多くのファンが惹かれて止まないのでしょうか。

そのあと、比庵展の観客への作品説明のため笠岡からきておられた豊池美術店の豊池勇様が、ご親切に金光教本部の教堂をご案内下さり、さらに我々三人が宿をとっている笠岡までご自分の車で送って下さったのですが、途中笠岡の古城山公園にある比庵歌碑にご案内いただきました。

城山の上の広場にただ射せる朝日より
見る海のある町

記録によれば建てられたのは昭和三七年九月。私は八年前に一度訪ねており、その時は筆太な文字に圧倒された思いがあります。改めて歌を読み直してみました。「ただ射せる朝日」の「ただ」とは、無心に限なく光を注ぐ朝日ということでしょうか。「朝日あり見る海のある町」、詠み手が朝日の中にあつて、前方に海が広がり、一人一人の生活のある町を見ているのです。おおかである

とともに、笠岡をこよなく愛する気持ちの溢れたいい歌だと思いました。
次いでJR笠岡駅に近い豊池美術店に伺いました。コーヒーをご馳走になり、「比庵作品なら豊池さんに聞け」と言われる比庵通、店内に収蔵されている幾点かの作品を見せていただいたあと、その夜の宿である笠岡グランドホテルに送って下さいました。このホテル内のワコーミュージアムに比庵作品が展示されるのですが、一〇日からの開会に備え目下準備中とのことで、事前の作品鑑賞は叶いませんでした。

四月四日（日）倉敷 高梁

朝から今にも降り出しそうな曇り空の中を、秋田展生様が宿に八時、車で迎えに来て下さいました。秋田様は比庵と深い親交のあつた浅口市の秋田秋良様のご令孫であり、征矢雄様のご令息です。ご自身比庵作品に詳しく吉備の地誌にも造詣が深い方で、これから二日間、我々を高梁市にご案内下さるのです。

それに先立ち浅口郡里庄町の古宮家に連れて行つて下さいました。このお宅のご両親が比庵とご昵懇で、比庵がよく遊びに来ておられたそうです。庭の片隅の築山に、比庵が歌会の召人を務められたときに詠まれた歌
ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけ
うぐひすの聲山よりきこゆ

の歌碑がありました。ご主人から聞き伝えのお話を伺い辞して倉敷の浅原山安養寺へ。このお寺については、『会報』12号に山種美術館参与の榎淵豊子様が記しておられますが、比庵の春夏秋冬および新年の歌が見事な陶板に複製されて襖になっており、これを拝見したかったです。先代の住職夫人智順様が待つておられ、幾種類もの椿が満開のなかを、境内の建物を説明頂いた後、先代の住職が改築された総檜造りのお大師堂に移り、目当ての陶板を拝見しました。原物は屏風書

きで、智順様によれば、比庵はこれを一気に書き上げられたそうです。この堂の改築時に原物は倉敷市立美術館に移され、代わりにこの陶板の複製を作ったと残されたということですが、実物よりはやや大き目ということでした。紙の原物はいつか褪せることがあっても、こちらはそのまま長く残るに違いありません。



安養寺 陶板の前で 一行 中央は前任職夫人智順様 左端は筆者

そのあと智順様のご案内で成願堂（宝物殿）へ。林立する等身大の毘沙門天に一瞬圧倒されました。一名毘沙門天本山といわれるこのお寺、かつては一〇八体あった毘沙門天像が今は四二体となり、毘沙門堂、宝塔に八体、この成願堂に三四体安置されています。安養寺の創建は古く七八二（延暦元）年とされ、当初は天台宗で今は真言宗。かつては浅原千坊といわれる寺院の賑わいの時代もあったようですが、南北朝の戦火や、儒教を重ん

じる池田藩の廃仏政策などの苦難を経て今は安養寺に集約されています。裏山の経塚からの貴重な出土品も多く、深い歴史を感じる古刹でした。とりわけ私の心に残ったのは堂に掲げられていた源平盛衰記の次の一節です。私たちは謡曲や歌舞伎で鬼界ヶ島に流された俊寛の物語をよく知っています。平家物語が

私たちが鹿ヶ谷に集まり、平家打倒を画策しますが露見、密議に参画した者は清盛の怒りを買ひ、ある者は斬られ、ある者は島流しとなり、俊寛もその一人でした。そのメンバーの中に大納言藤原成親という高位の人物がおりました。彼の妹は清盛の長男重盛の奥方だったので。それだけに清盛の怒りは強く、斬首は免れたものの今の岡山の児島に流され、平家物語では後日吉備の中山で謀殺されたとされています。しかし源平盛衰記ではその成親が何とこの安養寺で出家し、この地で匿われて生涯を全うしたとのことです。心の和む話でした。

安養寺を出る頃から雨になり、三五キロの距離を一気に倉敷から高梁へ。宿に荷物を置き雨中の備中松山城探訪。松山城の標高は四三〇米。五合目の城見橋公園まで各自マイカーで行き、城見橋公園から八合目の輔峠までは観光協会のシャトルバスが登城客を運ぶのです。四五分で輔峠に到着。ここにはよく知られた、比庵が故郷高梁を詠んだ

水清き川の流れて山高し

日は山を出で川をわたるも

の歌碑がありますが、市内と違って手入れもままならぬため歌碑が汚れてきているのは残念でした。登城客の歩くのは輔峠から城までの七〇〇米、雨中の二〇分ばかりの行軍、視界は霧り、ちよつと息切れしました。普段でも天空の城といわれる備中松山城、それが雨の日と来ているものだから天守閣から望む下界は完全に雲に遮られていました。

天守閣で城の沿革や市の歴史などを読み、雨のため受付事務所でおくつろぎ中の城主のさんじゅーろー（人気の野良猫）への目通りも叶い、同行のお二人と秋田様のお蔭で長年の念願を果たしました。

市内に戻り昼食をとって高梁市文化交流館内にある高梁市歴史美術館へ。学芸員の三宅裕子さんに連絡をとり、向かいの市文化会館に常設の比庵記念室を見学。丁度この日はホールで昼にNHKのど自慢大会があった後で、会館内には興奮が残っていました。この常設館はさすが比庵の故郷、それに清水家の所蔵品も寄贈されていて充実しています。正面に一段高い「佳境の間」ならぬ「歌境の間」が設けられ、比庵のブロンズ像のほか、比庵自筆の歌の彫られた遺愛の座卓や茶碗が飾られ、館内には年ごとに一羽ずつ雀の描き加えられていった「正月雀」、風景では「麦畑」「秋山」「静物では「ぶどう」「つわぶき」「白菜」、人物では「盆踊り」など、画の主題は違っても、おらかな歌を書き添えた特徴のある二〇点ばかりの比庵作品が、見学者の目を楽しませていました。その後もう一度歴史美術



高梁市文化会館比庵記念室「歌境の間」正面



日光市名誉市民章（左）と高梁市名誉市民章

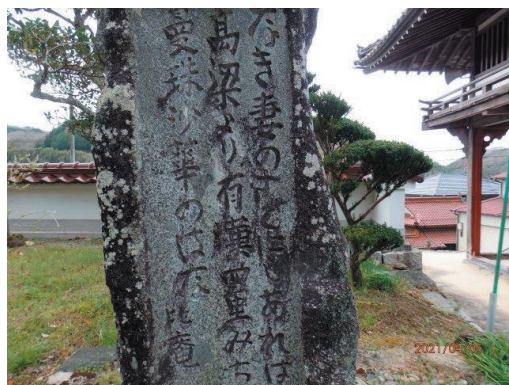
館に戻り、三宅さんにお願いし、比庵の日光市名誉市民章と高梁市名誉市民章を見せていただきました。また収蔵品の何点かを拝見できればと言う希望もありましたが、未整

四月五日（月） 有漢

昨日の雨は上がり、朝八時半、倉敷から再び秋田様が迎えに来て下さり、この日は有漢へ。有漢は冒頭に述べたように比庵のご母堂と鶴代夫人の生家笹田家のあった地。岡山県の県央部に位置し、もとは上房郡有漢町でしたが平成一六年に高梁市と合併、今は高梁市の一部です。高梁の中心部からさらに一六キロ北東に入った盆地で、鉄道はなく、路線バスが結びます。この地で創業一九一八（大正七）年の芳烈酒造がご自宅の広間を開放し、この日から一か月間比庵作品展を開催し、それを記念して純米吟醸酒「水清き」を発売されるのです。開場予定の九時より早く到着したので、先に笹田家の菩提寺であった浄池山寶妙寺を訪ねました。寶妙寺は真言宗御室派。山門が同時に鐘楼となっており、門に鐘を突く紐が垂れ下がっているのを珍しく思いました。山門の脇に歌碑があり

なき妻のさとしあれば高梁より
有漢四里みち曼殊沙華の花

という比庵の自筆の歌が刻まれています。下の句「有漢四里みち曼殊沙華の花」に夫人



寶妙寺歌碑「なき妻の」

への思いが滲み、ぐつと込み上げるものがありました。清水 固様によれば比庵は後日この歌の「高梁より」を「高梁ゆ」と、「より」を示す「ゆ」に推敲されたとのことでした。「より」、「四里」の音の重複を避けるためです。声調もよくなり歌としては形が整いますが、想いが素直に表れている原歌にも捨てがたい味わいがあると思いました。

芳烈酒造では難波国夫社長が醸造工程を一つ一つ説明下さいました。そして同酒造の酒の美味さに欠かせないものとして、備前米と有漢川の硬質の伏流水を挙げられました。とても人好きな社長さんで、毎年お仲間とこの酒蔵の土間を利用し「酒蔵コンサート JAZZ in UKN」を開催されているのだそうです。そのあと比庵展の広間へ。入口に

ありがたやありがたや

の書の額、中央に卓が置かれ、比庵の風景画「高梁川」の額と色紙「水清き」、輔峰の歌碑の写真そして今日売り出しの吟醸酒「水清き」が飾られていました。正面の床の間には画「紅白梅」、相寄る二本の梅が太々と描かれ

西東遠くへだてて年老いて
互いにほめる友人の居る

の歌が書き添えられています。「西東」の「西」とは「岡山」。「老いれば歌と書と画の外の話には興味なし」とも詠んだ比庵です。好きな短歌を褒め合える友のいるのは、本当に嬉しいことだったでしょう。実に素直な一首です。内側の壁に掛軸、額が並び、茶碗を含め豊池氏吟味の比庵作品三十点が、築一三〇年の広間に整然と配置されています。庭に面する側には奥様とご懇意な生け花の師匠が活けて下さった華やかな生け花、地域の人々の和を感じました。一〇時頃から見学客続々、寶妙寺の住職も来られ、期せずしてご挨拶の機会を得ました。

記念の吟醸酒「水清き」を購入し、そのあと難波社長に教えていただいた石の風車の立ち並ぶ草原「石の風車常山公園」で軽い昼食を摂り、午後は最初に、秋田様が国の重要文化財に指定されている上有漢の「保月の板碑」と「保月の六面石幢」に案内して下さいました。いずれも鎌倉後期一四世紀初期、奈



芳烈酒造比庵展入口



芳烈酒造比庵展会場

報』15号に相模女子大の柿木原くみ名誉教授が詳しく記しておられます。現在の一学住職はとても明るく話好きなお方で、何と寶妙寺の住職とは腹違いのご兄弟であることをご明かされました。お二人の印象の違いに一同顔を見合わせました。また珍しい有漢の地名について、「諸説あるが」と前置きをされた上で、「宇賀遷」つまり鶴による鮎獲りを業とする人々を意味する「鶴飼部」から転じたようだという話をされました。先々代琢壽住職の比庵との親交を示すように、箱に無造作に詰められた歌集『窓日』の初版本や桜の版木 書きものが次々に出てくるのには驚くばかり。もし目利きの人が一夏籠れば貴重な掘り出し物が随分ありそうに思えました。

そのあと住職のご案内で鐘楼に上りました。この鐘楼も寶妙寺と同じく山門と一体です。梵鐘には比庵のいろは歌と、琢壽住職の願文が刻まれています。三代英學上人の時に造られた名鐘が先の大戦で兵器の原材料に供出され、暫く梵鐘がなかったのですが、昭和三六年春有志の力によって復活したのです。当時の喜びが偲ばれました。山門を入った左手には、昭和三八年に建てられた当山の整備や梵鐘再建に尽くされた人々の顕彰碑がありますが、それにも「廣大山興隆の碑」と比庵の筆跡が刻まれていました。

実は有漢に入ってからずっと、我々三人

良の石工井野行恒の名作と言われ、当時信仰した仏の変遷が窺われる高さ三メートル前後の供養塔です。次いでこの石幢の持主でもある廣大山臍帯寺へ。ここは真言宗大覚寺派のお寺です。先々代の三五代住職大本琢壽氏が比庵と親密だったことが知られており、『会



齋帯寺頭彰碑「大山大嶽の碑」
(比庵書)

比庵の歌碑と 市井の人との交わり

文学の小径社

遠藤 堅三

は山国ながら由緒ありげなこの町の佇まいを不思議に思っていました。後日知ったことで

すが、この地は北東に備前・備中・美作の接点となる三飛峠があり、有漢川の流れに沿った肥沃な盆地という恵まれた地理的環境もありますが、日露戦争後若い男手を失い村存亡の危機の中を、一致協力して養魚場や醸造業など村興しに努め、教員養成所を創立し、さらには女子教育に力を注ぎ、学費は村負担という高等女学校を設立、大正の一時期「世界一の教育村」と呼ばれた歴史があったのでした。

比庵作品を訪ねる旅でしたから当然といえは当然ですが、この三日間、見るもの聞くもの比庵に因むものばかりで、何だかタイムスリップした世界で過ごしていたようです。それにしても比庵作品を愛する人や、縁のあった人々の多さに驚きました。でも豊池美術店の豊池 勇様の言葉が忘れられません。「どんなにいい作品でも時代とともに忘れ去られていきます。だから生きている者がしっかりとそのよさを訴えて、分かって下さる方の輪を広げておかなければなりません」。実際この秋、岡山県では真庭市で十字屋教育財団が、また浅口市で原田文学館がそれぞれ比庵展を開催することでした。あのおおらかな比庵の作品が時代を越えて多くの人の心に安らぎをもたらし、新たなフアンの広がりを願いながら、夕刻岡山を後にしました。

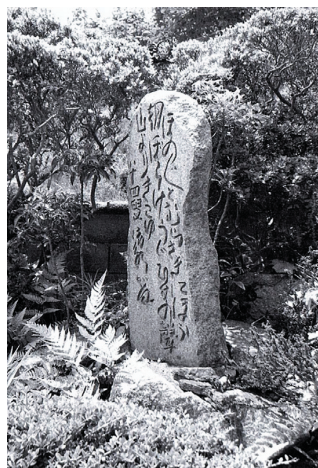
以上

比庵は川合玉堂、奥村土牛、片岡球子、上田桑鳩、小林和作はじめ全国各地に著名な多くの友との知遇を得て、まどかなる生涯をおくることができました。

本稿ではおそらく読者のほとんどの方がその名さえ知らない方との交流を通して、これらの私邸に建立された比庵歌碑の現状を紹介する。

戦後まもないころの昭和二十二年、比庵は岡山県笠岡での疎開生活を終え、東京駒込の娘明子の元に身を寄せた。笠岡での不自由な疎開生活の中でも比庵には秋田秋良外鈴音会など多くの歌仲間がすでにできていた。また何よりも妹岡本章子の居宅があり、当地での生活は比庵にとってもうすでに心と身体に馴染んでいた。帰京後も毎年五月から十月にかけて避暑がてら笠岡に来て、自ら近隣各地に足を運び交友を一層深めていた。

その内の一人、名は古宮久寿一氏である。



古宮邸歌碑「ほのぼのと」

「古宮緑春（同久寿一）は浜中の人。華道専門学院を卒業し、華道芸術学会員、華道池坊総華督、茶道裏千家、岡山女子

浅口郡里庄町の自宅の庭に歌碑がある。

ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけ
うぐひすの声山よりきこゆ

比庵が昭和四十一年正月宮中歌会の召人として詠んだものである。この歌は比庵歌碑の中で唯一このみであり、詠まれたその年の秋十月十九日に建てられた。比庵はこの日、秋田秋良や鈴音会の仲間たちと古宮邸の歌碑をみにいらしている。『紅をもて』に「大きな私邸の歌碑として丁度よく形も石も彫りも仲なかよい」と記している。

秋田秋良の日記には「浜中の古宮邸の建てられた比庵歌碑の傍らに咲いている花を見て里庄郵便局長の阿部さんが「比庵碑に照り添ふ紫式部かな」の名吟を詠んだことを思い出して一入なつかしく鑑賞した」とある。

さらに『下野短歌』（昭和四十二年三月号）に鈴音会のメンバーが歌碑について詠んでいる。

紫式部未だ素枯れず比庵碑に
けふふる冬の雨あたたかし 秋田秋良
築山の上にほどよく歌碑建ちて

ほのぼの明るる方に向ひぬ 柳生春乃
形よき赤石に刻まれし師のみ歌ほのぼ
のとして冬陽に匂ふ 塩飽香代乃

冬雨のそそげる歌碑にほころびて
八つ手の花芽ほのかに匂ふ 井上和子
比庵師の歌碑を訪ねてのぼりゆく
藪かけの道梅もどき赤し 小野美登志

里庄町誌に次の記述がある。

「清水比庵は、書、歌、画で有名である。昭和二十八年十月里庄比庵会を創立した。そしてしばらく古宮緑春氏宅に寓居されたことがあったので、その庭先に歌碑を建てた。」

さらに古宮緑春について次の記述がある。

短期大学原田学園講師、池坊笠岡支部長、岡山県池坊連合支部常任理事である。即ち、歌碑を建立したのは古宮緑春、本名古宮久寿一氏である。

そこで、私は昨年一月に古宮邸を訪ねた。今の当主は古宮家十八代目の布千（のぶちき）氏（昭和十一年生）である。布千氏の話は次のようでした。

「両親は全く歌を詠まなかったが、お茶、お花の師匠でその縁で戦前から比庵先生の妹、岡本章子さんと親交があり、戦後比庵先生がよくうちに泊まりに来ていた。日中、今はなくなっているが茶室でステテコ姿のまま筆をもっている姿をよく見かけた。洗濯ものがたまと笠岡の岡本さんに帰り、数日後また泊まりに来ていた。また正月には石臼でついた餅を東京へ贈ると、試筆の書をお返しとしていただいた。父はそれを里庄町の不動院さんや笠岡の竹喬美術館やワコムミュージアムに寄贈したので、今、うちには数点しか残っていない」とのことです。よかつたら後日、お見せしても」と言っていた。

さらにこんな話も「昔、茶室の東に竹藪がありそれをはさんで池があり北には低い山があり、季節の鳥のさえずりがよく聞こえてくる静かな場所でした。父から「この碑の歌は比庵先生が召人として天皇に献じた作品でうちの茶室で詠んだものなので、歌碑を建てたいと申し上げたところ喜んで二枚の紙に認めてくれそれをこの石に刻んだ。」と話してくれたのを憶えている。」

余談となるが、この歌は青梅の玉堂邸を想定し、先ず下の句が出来た。上の句は早起きの比庵、午前五時に起きて朝の窓を開くと、天気の良い日は実にほのぼのとむらさき匂う朝ぼらけというものが見えるのである。と『紅をもて』に記しているが布千さんの話を聞いてみるとなるほどここで詠まれたとしても不思議でないと感じる私がそこにいた。

比庵の歌碑の多くは市町村の手によるものや神社にあるが、知遇を得た個人の庭に建立されているものが岡山県内に九ヶ所ある。比庵没して約半世紀、全て比庵生前に建てられており、年を経て各家庭の事情もあり存続が危惧されることもある。

古宮邸は今でも里庄町にあるものの、笠岡の瀬戸邸の歌碑は都市開発計画により撤去され、一時避難していたが地元の方々の協力です岡山市立図書館の一角に据えられ安住の地となっている。

笠岡の市街地瀬戸邸に昭和四十五年歌碑が建立されていた。

瀬戸健二郎は笠岡の実業家(料亭三洋旅館、笠岡映画館のオーナー)であるが笠岡比庵会のメンバーでもあり、比庵の妹草子亡きあと比庵が笠岡に来たときは三洋旅館に逗留し近隣各地の歌友との交流を楽しんでいた。

昭和四十五年瀬戸は自宅の庭の植え込みに歌碑を建てた。比庵は平素のおもてなしのお礼に笠岡のおいしい魚料理のことを詠んだ。

柳はみどり花はくれなゐ食べものは天ぶら糸づくり酒はのまねど

今ひとつ気がかりは昭和四十七年建立された岡山市中区の二宮邸(歌人、書家)の歌碑である。

人を恋ひ世を恋ひこれは岡山の平井の君が庭の池のこひ

これは比庵の数少ない石への直筆のもので



瀬戸邸歌碑「柳はみどり」

本稿が比庵佳境の会のみなさまにお届けされる頃、比庵の作品展が岡山の浅口市鴨方町に一昨年開館された原田文学館で開催されています。(チラシ、図録参照) オナーの原田英樹より建物の設計から企画運営を委託され私と奥富紀子(文学企画学芸員)がわが子のように手塩にかけた日本一小さい文学館です。是非一度立ち寄りください、コロナの一日も早い終息を祈るばかりです。以上



二宮邸歌碑「人を恋ひ」

ある。二宮柏龍先生とは私も生前知己を得てしばらく交流があった、ある日二宮邸をお尋ねしたとき「比庵先生がうちにお泊りになるときはこの「ちゃんちゃんこ」をお召しになっていたんですよ」と教えていただいた。しかしながら先年お亡くなりになり空家となつて今ひとつそりと無人の庭にある。昨年二月ご子息の了解を得て歌碑に会いに行つた。空家とはいえご子息が庭の手入れをしているのか思ったほど荒廃してなく安心した。しかし比庵の詠んだ鯉の池はなくなっていた。「ちゃんちゃんこ」が気になりご子息に電話でお聞きすると「葬送の際、棺に入れて一緒に荼毘に付しました」とさりげなく言われたのが何となく遺族のお二人への優しい思いやりにほっとしました。

比庵の歌碑は我々の大切で貴重な文化遺産である。いつまでも保存したいと思う今日この頃である。

追伸

編集後記

比庵佳境の会 会長 清水 固

コロナ禍が猛威を振る中、比庵フアンの皆様はお元気の事と思います。「比庵佳境の会」会報も原稿作成者の全面協力を得て、枚数を増やして予定通り発行しています。

私は今年八十九歳となりましたが、関係者のサポートを得て何とか頑張っています。

本号は三人の方に執筆して頂きました。
・14号から連続で「清水比庵周辺の人々と自用印」とは柿木原くみ先生に執筆して頂いていますが、本号では比庵の書の評価高揚に大いに貢献した桑田笹舟・青山杉雨両氏の紹介と、比庵自用印について書いておられます。特に自用印についてはこのように細かく書いた資料を私は知りませんでしたので大変役に立ちます。自用印については引き続き次号(第17号)でも書いて頂く予定です。

・今春四月に比庵展等が開催された岡山周辺に私の代行として参加された首都圏の三有志(村本慎一氏、比留間哲生氏、窪田信行氏)を代表して村本氏にその紀行文を寄稿してもらいました。三日間にわたって金光、笠岡、倉敷、高梁、有漢と強行軍でしたが、その詳細を見事な文章で表現してありますので是非お読みください。

・岡山備南地区(吉備路周辺)の歌人などに詳しい遠藤賢三氏には「比庵の歌碑と市井の人との交わり」を書いていただきました。比庵の交友は有名人的みならず、市井の知遇を得た人々にまで学歴・年齢などに関係なく及んでおり、比庵の人間性の広さを示していますが、遠藤氏は個人の住宅に建立した歌碑にも触

れながらこれらを記述されています。比庵の歌碑は比庵芸術の一端として高い評価があるので大変参考になります。

今後の比庵展など

・村本氏が本号で書いている金光図書館の比庵作品展は、一〇月に展示作品を入れ替えて引き続き岡山県浅口市金光町金光図書館で来年三月まで開催されます。

・遠藤賢三氏が追伸として述べておられるように岡山県浅口市鴨方町の原田文学館では九月末から半年間比庵展を開催する予定です。

・岡山県笠岡市の和光ミュージアムでは笠岡グランドホテル内の美術館をリニューアルして、一階には比庵作品七〇点程と南画の津田白印の作品三〇点程を無料で四月から展示しています。

岡山周辺にお住まいの方や岡山地方にお出かけの機会にある方はこれ等の比庵展にお寄りください。

この他首都圏では、横浜市青葉区の墨の美術館と、私の地元横浜市栄区庄戸に改新築された庄戸会館で比庵展の今秋開催を企画していましたが、コロナ禍の情勢で開催困難と見て開催は来春以降に延期しました。

来春以降の比庵関連行事(比庵展)は来春発行の会報17号でご案内致します。

会費納入のお願い
令和三年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。
一口、1,000円(複数口歓迎)
三井住友銀行 鶴見支店 普通
7061558
名義 クボタノブユキ
なお現金で会長「清水固」宅(下記)に郵送されても結構です。

比庵佳境の会

会長 清水 固 (清水比庵の孫)
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
携帯 090-6340-0181
メール katashi-shimizu@hat-hi-ho.ne.jp
URL: http://www.hat-hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/
幹事: 比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488